

2019年度  
賢明学院高等学校  
入学試験

2019. 2. 9実施

国 語

(50分)

- ・ 答えはすべて解答用紙に記入すること。
- ・ 字数制限があるすべての設問において、句読点など文章記号は字数にふくめます。
- ・ 問題文は、設問の都合上、一部省略・表記を改めたところがあります。

|         |
|---------|
| 受 験 番 号 |
|         |

【一】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

言葉というのは、自分が関わっていく世界に対していわば網をかけて、その世界から自分たちなりの「意味」をすくいとることによって、私たちの情緒や論理を築き上げていく知的ツールなのです。自分が世界をどう見て、どう感じているのか。そこを、自分なりの言葉ですくいとってくると、いろいろなものが得られるのです。

しかし、※いま取り上げた「阻害語」群は、人間の情緒や論理を築き上げていくための網の目としては、あまりにもあらずぎるのです。人間が「生きる」ということにとって、もつとも本質的な核である「生のおじわい」というのは、五感を通して世界を味わい感じることなのですが、そういう情緒の深度というものが、「阻害語」を使うことによって、知らず知らずのうちにくぐく浅いものになってしまっている感じがするのです。それがとても気になるところです。

①コミュニケーションに関する不安感というのは、じつはこうした空疎な言葉遣いから発生しているのかもしれませんが。あるいはこうした言葉がいわば日常的なコミュニケーションの中心語になることによって、ますます不安感がaジヨチヨウされることもあるでしょう。

こういう不安感から脱却するための、手っ取り早くて楽な近道はありません。それなりの労力を伴います。そのためには生のおじわいの深度を深めることにつながる言葉を、少しずつ地道に自分のものにしていくことがAまずなにより必要になるのです。そうした言葉のストックが増えれば、それまで漠然としていた自分の問題に、なんとなく輪郭をつけてとらえられるようになります。もちろんそのことが自分自身のなかのややもやした不安感を解消することにつながるとは限りませんが、でも、自分の生きている形のようなものの輪郭をとらえる手がかりをつかむことはできますから、自分が何を恐れ、何に不安を感じているのが少しずつ見えてきます。社会学の用語でいうと、「自己対象化」あるいは「セルフモニタリング」の力を身につけることによって、自分と他者とのつながり、自分と社会との関係が少しずつ見えてくるようになるのです。そして情緒や論理の深度を深める言葉を増やすためには、やはり読書が一番の早道だということにBなります。

直接的に目に入ってくる「活字」に気をとられてよくわからないことが多いのですが、本を読むことの本質とは、じつは筆者との「対話」にあるのです。

教育学者の齋藤孝さんがいろいろ述べていますが、読書で何がすばらしいかというところ、I極端な話、源氏物語や、万葉集でも平家物語でも何でもいいのですが、千年以上前の人間、しかも歴史を代表する知性や感性を持った大人物とだつて対話ができるということなのです。あるいはドストエフスキーやトルストイを読むということは、時代が百年以上違う、しかも外国の、直接には決してコミュニケーションを取ることがまったく不可能な天才たちと対話をしているということなのです。

目で活字を追いながらも、筆者の声が聞こえてくる感じがつかめることが、本を読めばいつでもというわけにはいきませんが、確かにあります。そのことを本当に実感したことがあります。

私はゲオルク・ジンメルという約百年前ドイツで活躍した社会学者の研究をbセンモンにしている、数年前に『ジンメル・つながりの哲学』(NHKブックス)という本を書きました。その作業中、まさに百年前にドイツで生きたジンメルという人間と、「どうなの?これどうなの?」という会話をしている実感があつたのです。たしかにそこまでのめり込むにはそうとうな集中力を要します。でも、真剣にある程度耳を傾けようと思えば、(へいま・こころ)にはいない著者と、いつのまにか直接対話しているような感覚を味わえることもあるのです。

みなさんでしたら、大好きな小説家、詩人、歴史上の人物でもいいでしょう。本の世界に。ポットウしていくと、文字を通して、書き手や登場人物の肉声がなんとなく聞こえてくるような感覚、コミュニケーションがだんだん双方向になっていく感覚が生じてくることがあるのです。

もちろん本を読めばいつでも、というわけにはいきません。II、私が『つながりの哲学』を書いていたときは、「ジンメルだったら今の日本をどういうふうに見るんだろうな」というようなことを、ずっと考えながら執筆していたので、なんとなく彼がいつのまにか今の時代にタイムスリップしてきて、今の日本を見ながら私に語りかけてくれているような気分になっていました。コミュニケーションの本質って、じつはこういうところにあるんじゃないかと思えます。

具体的な人との関係でも、②漫然と言葉を交わしているだけではだめなのです。ちよつと心地よくなる、すぐその場を放棄できてしまう言葉がいくつも準備されていて、自分の感覚的なノリとかリズムとか、そういうものの心地よさだけで親しさを確認していると、やはり関係は本当の意味で深まっていきません。料理でいうと「苦み」のない、ただ甘いだけの料理を求めてしまう感じですね。

ハリとリズムだけの親しきには、深みも味わいありません。そればかりか、友だちはE多いのに寂しいとか、いつ裏切られるかわからないとか、ノリがちよつと合わなくなってきたらもうダメだとか、そういうdキハクな不安定な関係しか構築できなくなるのではないかと思えます。

読書のよさは、一つには今ここにいない人と対話をして、情緒の深度を深めていけること。しかも二つ目として、くり返し読み直したりすることによって自分が納得するまで時間をかけ理解を深めることができること(実際の会話では「えっ、今なんて言ったの。もう一度言ってみて」、なん

て何度も聞きなおすことはできませんものね)。あと三つ目としては、多くの本を読むということは、いろんな人が語ってくれるわけですから、小説にしても評論にしても、「あ、こんな考え方がある」「ナルホド、そういう感じ方があるのか」という発見を自分の中に取り込めるといふこと。実際のつき合いではそんなにいろいろなキャラクターの人とコミュニケーションすると「人疲れ」することがありますよね。でも本を読む上では作者でも登場人物でも、いろいろな性格の人と。ヒカク<sup>ヒカク</sup>的楽に対話することができます。その結果、少しずつ自分の感じ方や考え方を作り変えていくことが出来るわけです。そういう体験を少しずつ積み重ねることは、多少シンドイ面もありますが、慣れてくると、じつはとても楽しい作業になるのです。

(菅野仁『友だち幻想 人と人の(つながり)を考える』より)

注 ※ いま取り上げた「阻害語」<sup>そがいご</sup>：「阻害語」は筆者の造語。「コミュニケーション阻害語」のことで、自分と相手のコミュニケーションを著しく阻害する危険性のある語をさす。「ムカツク」や「ヤバイ」などがその例であり、本文直前でこれらのことが述べられていた。

問一 二重傍線部 a～e について、カタカナを漢字に直しなさい。

問二 波線部 A～E の品詞を次のア～キの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

ア 名詞    イ 動詞    ウ 形容詞    エ 形容動詞    オ 副詞    カ 助詞    キ 助動詞

問三 傍線部①「コミュニケーションに関する不安感」について、こうした「不安感」から抜け出すために、最も必要なことは何だと筆者は述べていますか。本文中の言葉を用いて、三十五字以内で答えなさい。

問四 

|   |   |    |
|---|---|----|
| I | ・ | II |
|---|---|----|

 に当てはまる最も適切な語句を次のア～エの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

ア たとえば    イ しかも    ウ つまり    エ でも

問五 傍線部②「漫然」の意味を次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア しつかり    イ はつきり    ウ ぼんやり    エ こっそり

問六 読書の効用について述べた次のア～エの中から、本文の内容として正しいものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア 今ここにいない人と対話し、視覚のみを通して世界を味わい感じることへの深度を深めることができる。

イ くり返し読み直したり、実際に作者に連絡を取ったりすることによって、理解をさらに深めることができる。

ウ くり返し読み直すことによって、自分が納得するまで時間をかけ、理解を深めることができる。

エ 作者や登場人物の考え方や感じ方に触れることで、新しい発見を自分の中に取り込むことができる。

問七 本文を通して、筆者が読者に一番伝えたいことは何か。最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人類が言葉が必要とする理由    イ 天才たちと対話することの意義

ウ 読書が人間に与える余暇の楽しみ    エ 他者と適切な関係を築くための方法

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

友人・山口の紹介で「ぼく」の画塾へ来ることになった大田太郎に、「ぼく」は実際に絵を描かせてみたが、どの絵を見ても人間がおらず、努力を途中で放棄した類型の繰り返しに絵しか描けていなかった。「ぼく」はなんとか太郎の心をときほぐそうとしてみたがうまくいかず、苦戦していた。

まるで画を描こうとしない子供のこわばりをぼくはいままでに何度かときほぐしたことがある。ぼくはある少年を仲間といっしょに公園につれていった。この子は幼稚園でぬり画ばかりやっていたので、太郎とおなじように自分で描くことを知らない、憂鬱<sup>ゆううつ</sup>なチューリップ派だった。ぼくは地面にビニール布をひろげ、あらかじめ絵具や紙や筆を用意してから、彼といっしょにブランコにのった。はじめのうち、彼はすくんでおびえていたが、何度ものったりおりたりしているうちに昂奮<sup>こうふん</sup>しはじめ、ついに振動の絶頂で口走ったのだ。

「お父ちゃん、空がおちてくる」

彼を救ったものはその叫びだった。一時間ほど遊んでから彼は画を描いた。肉体の記憶が古びないうちに描かれた画は<sup>※1</sup>鋳型を破壊してはげしいうごきにみちていた。

綱ひきや相撲が効を奏したこともあるが、肉体に訴えるばかりが手段ではない。子供は思いもよらない脱出法を考えだすものだ。《中略》

太郎の場合に困らされたのはぼくが彼の生活の細部をまったくいっていいほど知らないことだった。<sup>※2</sup>鋳鉄製の唐草模様の柵<sup>さく</sup>でかこまれた美しい邸のなかで彼がどういふふうに暮らしているのか、そこでなにが起っているのか、ぼくには見当のつけようがなかった。ピアノ教師や家庭教

師をつけて大田夫人が彼に訓練を強制し、また、作法についてもかなりきびしく彼を支配しているらしい事実はわかって、太郎自身がどんな感情でそれを受けとっているのか、内心のその機制を覗きこむ<sup>a</sup>。シ料をぼくはなにひとつとしてあたえられていなかった。彼はほとんど無口で感情を顔にださず、ほかの子供のようにイメージを行動に短絡することがないのである。<sup>※3</sup>フィンガー・ペイントがしりぞけられたので、ぼくはつぎに彼を仲間といっしょにぼくのまわりにすわらせてドウ話を話して聞かせたが、その結果、聡明な理解の表情は浮かんでも、彼の内部で発火するものはなにもないようだった。話がおわると子供たちは絵具と紙をもってアトリエのあちらこちらにちらばり、太郎はひとりよりのこされた。ブランコにのせることもやってみたが、失敗だった。彼はぼくがこぎはじめると必死になってロープにしがみつき、笑いも叫びもなかった。おろしてやるとこの優等生の小さな手はぐっしり汗ばんで、蛙の腹のようにつめたかった。ぼくは自分の不明と、ソ暴を恥じた。彼は恐怖しか感じなかったのだ。これで彼の清潔な皮膚のしたに<sup>※4</sup>荒蕪地<sup>こうぶち</sup>があることはありありとわかったが、うっかりすると聞きもらしてしまいそうな、<sup>①</sup>小さなつぶやきを耳にするまでは、ぼくはただその周辺をうろろ歩きまわるばかりで、まったく手のくだしようがなかった。

二十人ほどの画塾の生徒のなかに、ひとりかわった子がいた。彼には<sup>a</sup>キ妙な癖があり、なにを描いてもきっちり数字を守らねば気がすまなかった。学校から遠足に行くと、何人参加して何人休んだかということをおぼえておいて、つぎに面を描くとき、それをそのまま再現するのである。五十三人なら五十三人の子供が山をのぼるところを彼はひとりずつ指折りかぞえて描きこむものだから、この子が遠足を描くんだといいたすと、ぼくは一メートルも二メートルもつぎたした紙を用意してやらねばならない。

ある日、彼は兄といっしょに小川で<sup>※5</sup>かいぼりをした。そして、その翌日、酔ったままぼくのところへ紙をもらいにきたのである。おむすび型をした彼の頭のなかでは二十七匹のエビガニが足音たててひしめいていた。

「お兄ちゃん、二十七匹だけ。エビガニが二十七匹だけ！」

彼はぼくから紙をひったくると、うつとりした足どりでアトリエの隅へもどつてゆき、床にしゃがみこむと、鼻をすすりながら面を描きだした。

《中略》

「……なにしろ肩まで泥ンなにかつかったもんなあ」

彼はそういつて、まだ爪にのこっている川泥を鉛筆のさきでせせりだしてみせた。仲間はおもしろがって三人、五人と彼のまわりに集まり、口ぐちに自分の意見や経験をしゃべった。アトリエの隅はだんだん黒山だかりに子供が集まり、騒ぎが大きくなった。

すると、それまでひとりぼっちで絵筆をなぶっていた太郎がひよいとたちあがったのである。みていると彼はすたすた仲間のところへ近づき、人だかりのうしろから背のびしてエビガニの面をのぞきこんだ。しばらくそうやって彼は面をみていたが、やがて興味を失ったらしく、いつもの遠慮深げな足どりで自分の場所へもどつていった。ぼくのそばをとおりながらなげなく彼がつぶやくのが耳に入った。

「スルメで釣ればいいのに……」

ぼくは小さな鍵を感じて、子供のために練っていた<sup>※6</sup>グワッシュの瓶をおいた。ぼくは太郎のところへゆき、いっしょにあぐらをかいて床にすわった。

「ねえ。エビガニはスルメで釣れるって、ほんとかい？」

ぼくは A にきりこんだ。ふいに話しかけられたので太郎はおびえたように体を起した。ぼくはタバコに火をつけて、一息吸った。

「ぼくはドバミミズで釣ったことがあるけれど、スルメでエビガニというのは聞きはじめだよ」

ぼくが笑うと太郎は安心したように肩をおとし、筆の穂で画用紙を軽くたたきながらしばらく考えこんでいたが、やがて顔をあげると、キツパリした口調で

「スルメだよ。ミミズもいけれど、スルメなら一本で何匹も釣れる」

「へえ。いちいちとかえなくていいんだね？」

「うん」

「妙だなあ」

ぼくはタバコを口からはなした。

「だって君、スルメはイカだろう。イカは海の魚だね。すると、つまり、川の魚が海の魚を食うんだね？……」

いつてから、しまったとぼくは思った。この理屈はにがい潮だ。<sup>②</sup>貝は蓋を閉じてしまう。やりなおしだと思って体を起しかけると、それよりさきに太郎がいった。

「エビガニはね」

彼はせきこんで早口にいった。

「エビガニはね、スルメの匂いが好きなんだよ。だって、ぼく、<sup>※7</sup>もうせんに田舎ではそうやってたんだもの」

太郎の明るい薄茶色の瞳には、はっきりそれとわかる抗議の表情があった。ぼくは鍵がはまってカチンと音をたてるのを聞いたような気がした。これは新発見であった。大田夫人からも山口からもぼくは太郎が田舎にいたことがあるなどとは一言も教えられていなかった。大田夫人が後妻だということを知りても、ずっとぼくは太郎が都会育ちだと思いきんでいたのだ。たしかに荒蕪地はアスファルトで固められているが、<sup>③</sup>ずっと遠い暗がりには草と水があったのだ。ここから掘り起していこうとぼくは思った。ただ、<sup>④</sup>いままで伏せられていたこの事実にはどこか秘密の匂いがあつた。いまの大田夫人が田舎にいたとはちよつと考えられないことだった。ぼくは床にあぐらを組みなおすと、<sup>⑤</sup>もつぱら話題をエビガニに集中して太郎といろいろ話しあつた。

(開高健『裸の王様』より)

- 注
- ※1 鋳型いがた…溶かした金属を流し込んで作る鋳物いものを作るための型のこと。
  - ※2 鑄鉄製の唐草模様の柵からくさ…鉄でできた唐草模様の柵。
  - ※3 フィンガーペイント…筆などの道具を使わず、自分の指や手を使って絵を描くこと。
  - ※4 荒蕪地こうぶち…土地が荒れて、雑草がしげるがままになっている土地。
  - ※5 かいぼり…池や沼の水を汲みだして泥をさらい、魚などの生物を獲り、天日に干すこと。
  - ※6 グワツシュ…不透明な水彩絵の具の一種。
  - ※7 もうせん…ずっと前。

問一 二重傍線部 a～d の語句のカタカナ部分と同じ漢字を使用するものを次の①～④の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- a ① シ質をとりすぎる。 ② シ金を調達する。 ③ シ実に基づく。 ④ シ法試験に合格する。
- b ① ドウ顔な面持ち。 ② ドウ徳教育。 ③ ドウ一人物。 ④ 客のドウ線。
- c ① ソ野な振る舞い。 ② ソ先の霊を弔う。 ③ ソ水が流れる。 ④ ソ質がある。
- d ① キ日を守る。 ② キ道を修正する。 ③ キ跡が起こる。 ④ キ路に就く。

問二 傍線部①「小さなつぶやき」とありますが、その「つぶやき」を本文中から具体的に抜き出して答えなさい。

問三 A に入る「前置きなしに本題に入ること」を意味する四字熟語を答えなさい。

問四 傍線部②「貝は蓋を閉じてしまう」とはどういう意味ですか。最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 太郎が、他の画塾の子供たちと仲間になるのをあきらめてしまうという意味。
- イ 太郎が、一度表しかけた感情をあらわにすることをやめてしまうという意味。
- ウ 太郎が、過去の記憶を思い出すことをやめてしまうという意味。
- エ 太郎が、エビガニを釣る一番の方法を教えなくなるという意味。

問五 傍線部③「ずっと遠い暗がりには草と水があった」に使われている表現技法を次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 直喩 イ 暗喩 ウ 擬人法 エ 擬態法

問六 傍線部④「いままで伏せられていたこの事実」とあるが、どんな事実か。「～という事実」に続くように本文中から十字以上、十五字以内で抜き出して答えなさい。

問七 傍線部⑤「もつぱら話題をエビガニに集中して太郎といろいろ話しあつた」とあるが、「ぼく」がそうしたのはなぜか。「鍵」という語句を使って三十文字以内で説明しなさい。

問八 本文の内容と最も一致するものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「ぼく」の画塾の子供たちは個性的なので、不器用な「ぼく」は常に振り回されている。
- イ 「ぼく」は太郎のような子供に絵を教えることで、自分の自尊心を満足させている。
- ウ 「ぼく」は太郎の心を開こうと注意深く彼を見つめ、そのきっかけをつかみつつある。
- エ 「ぼく」は太郎のかくれた絵の才能を開花させるために、様々な方法を試みている。

【三】次の古文を読んで、後の問いに答えなさい。

※<sup>1</sup>朱買臣、※<sup>2</sup>文の道は富めりしかども、家貧しかりけり。※<sup>3</sup>年ごろの妻、住み①わびて、※<sup>4</sup>暇をこふに、「いま一年を待て」としたひをしめども、聞かずして別れ去りぬ。その次の年、買臣、ふるさとの※<sup>5</sup>会稽の守になりて赴く時、かの妻、国の民の妻となりて、買臣に見えにけるを、恥ぢ悲しみて、※<sup>6</sup>消え入りにけりとなむ。

※<sup>7</sup>呂尚父が妻、同じく家を住みわびて、離れにけり。呂尚父、王の師となりて、いみじかりける時、かの妻、帰り来て、もとのごとくあらむことをこひのぞむ。その時に、呂尚父、桶一つを取り出でて、「これに水入れよ」といふまに②入れつ。「こぼせ」といへば、こぼしけり。さて、「③もとのやうに返し入れよ」といふ時、④妻笑ひて、「土にこぼせる水、いかでか返し入れむ」といふ。呂尚⑤いはく、「汝、われに縁尽きしこと、⑥桶の水をこぼせるに同じ。いまさら、いかでか帰り住まむ」とぞいひA。これら、ものねたみにはあらねども、貧しき世を忍びえず、心短きたぐひなり。

『十訓抄』より)

《注》※1 朱買臣…中国、前漢時代の政治家。

※2 文の道…学問の方面の才能。

※3 年ごろの妻…長年連れ添った妻。

※4 暇をこふ…別れること。離縁。

※5 会稽の守…会稽という郡都の長官。

※6 消え入りにけり…死んでしまった。

※7 呂尚父…太公望。周の文王に仕えた賢臣。

問一 傍線部①「わびて」の意味を、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア つらく思つて    イ 申し訳なく思つて    ウ 謝ろうと思つて    エ 幸運に思つて

問二 傍線部②「入れつ」の主語を次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 朱買臣    イ 朱買臣の妻    ウ 呂尚父    エ 呂尚父の妻

問三 傍線部③「もとのやうに」、⑤「いはく」をそれぞれ現代仮名遣いに直しなさい。

問四 傍線部④「妻笑ひ」の理由として、最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 呂尚父が自分を許してくれそうだから。

イ 呂尚父が同じ事を繰り返してさせるから。

ウ 呂尚父が常識ではありえないことを言ったから。

エ 呂尚父のことを再び愛しく思うようになったから。

問五 傍線部⑥「桶の水をこぼせるに同じ」とは、何のたとえですか。「〜こと。」に続くように、十字程度の現代語で答えなさい。

問六 A にあてはまる言葉を次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア けら    イ けり    ウ ける    エ けれ

問七 朱買臣の妻と、呂尚父の妻の共通点として、最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 夫に対する嫉妬心が強い。    イ 貧しい境遇への忍耐が足りない。

ウ ずうずうしくて気が短い。    エ 出世に対して貪欲にこだわる。

問八 この話の内容と同じ意味のことわざを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 覆水盆に返らず    イ 水魚の交わり    ウ 上手の手から水が漏れる    エ 雨降つて地固まる

【四】次の問いに答えなさい。

あなたは、中高一貫校の高校一年B組の美化委員です。昨日の美化委員会では、来週の校内清掃活動の内容についての説明がありました。その内容を、今日の朝礼で、クラスに連絡します。そこで、連絡するための【原稿】を、【美化委員会で配られた実施要項】をもとに作りまし

【美化委員会で配られた実施要項】

【原稿】

### 校内清掃活動 実施要項

1. 目的  
外部から多くのお客さまが来校される文化祭を前に、日頃清掃できない場所をきれいにする。
2. 日時  
9月10日(金) 6時間目
3. 清掃区域  
全クラス：HR教室  
中学1、2年生：教室前廊下  
中学3年生：トイレ・手洗い場  
高校1年A～C組：グラウンド  
高校1年D～F組：体育館  
高校2年：テニスコート  
高校3年：新館・特別教室
4. 持ち物  
屋外清掃には軍手が必要。

( a ) ( b ) ( c )

この活動の目的は、外部から多くのお客さまが来校される文化祭を前に、日頃清掃できない場所をきれいにすることです。私たちのクラスの清掃区域は、( d )と( e )です。なお、( e )の担当者は、( f )を持ってきてください。

問一 ( a ) ( c )に入るセリフを次のア～エの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 実施日時は九月十日金曜日の六時間目です。      イ 校内清掃活動について説明します。  
ウ 美化委員から連絡します。      エ 何か質問はありますか。

問二 ( d ) ( f )に当てはまる言葉を、【美化委員会で配られた実施要項】から探して答えなさい。

- 問三 この連絡のあと、出てきそうな質問として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。  
ア クラス内での掃除分担はどのようにしますか。      イ 何を持ってきたらいいですか。  
ウ なぜ中間テスト前なのに授業がないのですか。      エ 清掃活動に参加しないクラスは何をしますか。  
オ 美化委員の仕事はやりがいがありますか。

【五】次の各問いに答えなさい。

問一 次の①～⑤の傍線部のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

- ① 昔の名残をとどめている。      ② 任務を遂行する。      ③ セイオウ諸国の対応。  
④ 作業のエンカツな流れ。      ⑤ 一人だけユウエツ感を味わう。

問二 次の①②は類義語、③④は対義語が完成するように□に入る漢字一字を答えなさい。

- ① 未来⇕□来      ② 動機⇕□因      ③ 冷淡⇕□切      ④ 偶然⇕□然

問三 次のア～エの傍線部の言葉の使い方が適当でないものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 相手チームの不意について、一泡吹かせてやろう。  
イ 僕はすっかりやりこめられて、ぐうの音も出なかった。  
ウ 彼はいつも横車を押すので、友達から好かれている。  
エ 大事な役目を無事に終えて、肩の荷が下りたような気がする。

問四 次の①・②の慣用句の意味をア～エの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- ① 開いた口がふさがらない【ア 困って口ごもる      イ 余計なことを言わない      ウ あきれてものが言えない      エ おしゃべりが過ぎる】  
② 灯台下暗し【ア 効き目がない      イ 元気なくしよげる      ウ 身近なことは気づきにくい      エ 自分のことはおろそかにしすぎだ】

問五 次の①～③の傍線部の助動詞と意味用法が同じものをア～エの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- ① 隣の家は留守らしい。      ② 私はこの学校の生徒だ。      ③ 外がうるさくて勉強ができない。  
ア 彼の態度は男らしい。      ア 森の中はとても静かだ。      ア 英単語が覚えられない。  
イ かわいらしい花が咲く。      イ 面白い本を読んだ。      イ ここに置いたペンがない。  
ウ マラソン大会は中止らしい。      ウ ここは自然が豊かだ。      ウ 家の手伝いは容易ではない。  
エ 紳士らしい態度をとる。      エ あそこにいるのが私の兄だ。      エ 夢のないことを言う。